

介護保険施設に勤務する介護福祉士の技能に関する ピア・レビュー

—養成ルート別の特徴について—

A Peer Review Regarding Skills of Care Workers
at Nursing Care Facilities

—Characteristics by Each Training Route—

青木 宏心
(Aoki Hiromune)

Abstract :

Ever since care workers and social welfare services law were established more than 20 years ago, the number of registered care workers in Japan has exceeded 770,000 as of today. There are two different paths to be a qualified care worker, namely through “practical experience” and “a training school”; the candidate is qualified to sit for the national examination after three years of practical experience at nursing care facilities, etc. in the former route, while in the latter route, the candidate is exempted from the national examination if he/she had completed a training course at an university, a community college, or a special school. In this study, whether or not their technical characteristics differ by the path they took to achieve the national qualification for a care worker was revealed by peer reviews made by the care workers according to the different training routes.

キーワード：介護福祉士養成教育、ピアレビュー、介護

Key Word : School Training and Practice for a Student of Health Care, Peer Review,
Health Care

I. はじめに

1. 緒言

介護福祉士登録者数は、1987年に制定された社会福祉士及び介護福祉士法による制度創設以降から現在まで、順調に増加を続けているといえる。2009年に実施された第21回介護福祉士国家試験の合格者を加えると、総登録者数は77万名¹⁾を超えた。

中島²⁾は、これからの介護福祉士のあり方について、「数の確保を優先すべきという第I期（ゴールドプラン、新ゴールドプラン、介護保険創設期）から、真に専門職と呼ぶことのできる

高い質を確保することが課題である第II期に入ったという共通認識を持つことが必要である」と提言している。澤田³⁾は、介護福祉士の質とは、幅広い専門的な知識や技術を持ち合わせていることに加え、サービスを提供する際の接遇面での質を問うものであると提言している。今後は現在のホームヘルパー養成制度が廃止されて、高齢者のケアは介護福祉士に一本化を図る方向性が示されてもおり、国レベルにおいて介護福祉士の質的な向上がますます望まれているといえる。

厚生労働省においても、2000年の社会福祉基

礎構造改革⁽⁴⁾の中で、「良質なサービスを支える人材の養成・確保」という項目において、高齢者介護職の一つである介護福祉士について、①「保健医療との連携」や、②「介護保険制度の実施に対応した教育課程の見直し」、また③「実習教育の強化」、④「卒後継続教育の充実」など、全般に渡る質の向上が挙げられ、介護に携わる人材の育成と資質の向上は重要な課題として位置付けられ、介護の中心的担い手である介護福祉士の質の向上に対する取り組みが本格化してきた。

厚生労働省の社会・援護局においては2003年に「介護福祉士試験のあり方等介護福祉士の質の向上に関する検討会」⁽²⁾が、2006年には厚生労働省社会・援護局長の私的懇談会として「介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直し等に関する検討会」⁽⁵⁾が設置され、介護福祉士試験の在り方や介護福祉士の質の向上に関する検討を重ねた結果として、報告書もまとめられている。

現状の介護福祉士資格取得制度は、大きく①国家試験ルートと②養成施設ルート、そして③福祉系高校ルートの3つに分けられている(③福祉系高校ルートは、国家試験を受験する仕組みのため、以後は①国家試験ルートに含んで述べることとする)。このうち、国家試験ルートによる資格取得の介護福祉士登録者数は介護福祉士全体の約60%を占め、厚生労働省の指定する種別の介護施設において実務経験3年(従業期間1,095日以上、従事日数540日以上)を積んだ者に受験資格が与えられ、一次試験の筆記試験に合格した者が二次試験の実技試験を受験する仕組みとなっている。

もう一方の養成校卒業ルートによる資格取得の介護福祉士登録者数は、介護福祉士全体の約40%を占める。このルートは2009年入学生から新たなカリキュラムとなり、養成にかかる時間数などの変更も行われたが、それまでの旧カリキュラムでは全国に約425校501課程(2007年5月現在)が存在する介護福祉士養成校に入学し、1,650時間の養成教育を受けて卒業すると、国家試験の受験は免除となり介護福祉士として資格登録することができる仕組みとなっ

ている。この1,650時間のうちの1,200時間は学内での講義と演習であり、450時間は介護実習と定められているが、介護福祉士養成校における介護実習は、介護福祉士登録資格を取得するための必修条件である。また、介護福祉士養成校の修業年数は、入学前の学歴や所持資格の有無によって差があり、最短では保育士、幼稚園教諭の資格を持つ者のみが入学できる1年制(専攻科)から最長で4年制(大学)までがある。

これまで述べたように、介護福祉士資格取得には同一資格でありながらも、複数の資格取得のルートが存在しており、それは簡単に分類するならば「国家試験を受験する」国家試験ルートと、「国家試験が免除になる」養成校卒業ルートとなる。更にこの2つの資格取得のルートに加えて、近年急増する介護福祉士国家試験受験者への対応措置として、平成17年度からは国家試験ルートによる資格取得者を対象とした、「介護技術講習会」も開始された。この介護技術講習会は、厚生労働省の「介護福祉士試験の在り方等介護福祉士の質の向上に関する検討会報告書」の提言を踏まえて、介護等に関する専門的技術についての講習(介護技術講習)を修了した者に対して実技試験を免除する制度を導入することにより、介護福祉士試験受験者の介護技術の向上を図るとともに、実技試験における受験者等の負担軽減等を通じた実技試験の適正な実施を図り、もって介護福祉士の質の向上に資するものという定義のもと、日本介護福祉士養成施設協会から指定を受けた全国各地の介護福祉士養成校において、介護福祉士養成施設協会が養成した介護技術講習会主任指導者と、主任指導者からの伝達講習によって養成された介護技術講習会指導者の指導によって32時間の講習が行われている。この講習会を受講した者は、介護福祉士国家試験の一次試験である筆記試験が不合格になったとしても、その後2回まで(最大3回まで)は二次試験である実技試験免除の優遇を受けて一次試験の筆記試験のみ合格すれば介護福祉士資格登録ができるということもあり、多くの受講希望者を呼んでいる。

筆者はこのうちの養成校卒業ルートの介護福祉士養成を行う介護福祉士養成校に介護教員と

して身を置きながら、先に述べた介護技術講習会の主任指導者として、さらに介護福祉士国家試験の二次試験である実技試験の実地委員（試験監督）としても活動した経験があることから、この国家試験ルートと養成校卒業ルートの中間的な立場に存在していると認識している。

その立場から、この2つの養成システムにはそれぞれの特徴というものが存在し、それが介護福祉士としての質に関して様々な影響を与えているのではないかと感じている。たとえば、筆者の経験では、国家試験ルートによる資格取得者の一部では、養成校卒業ルートの資格取得者に対して、「学校を卒業するだけで国家試験が免除になり、簡単に取れるルート」と評価するケースや、さらには、「金で買った資格」と評価することさえもあり、そのような評価を養成校卒業ルートによる資格取得者は施設での実習中に、その施設の職員である国家試験ルートによる資格取得者から直接言葉として浴びせられることにより、国家試験ルートによる資格取得者への不信感につながるというケースも見ている。つまり、筆者は、同一資格ながらそれを得るために2つの養成ルートがあるため、その提供するケアの質に違いが生じている可能性があると感じている。さらに、そのことのために同じ職種内での連携・協働がうまく図られず、高齢者のケアに関しても好ましからざる影響を与えているのではないかと懸念している。

2. 先行研究の到達点と課題

先行研究については、本来、国家試験ルートによる資格取得者と養成校卒業ルートによる資格取得者のケアの質の違いを取り上げた研究に限定するべきであるが、そういった研究はほとんど見あたらないため、現段階では国家試験ルートによる資格取得者あるいは養成校卒業ルートによる資格取得者が明確に区別されていない研究も含めてレビューすることとした。

国家試験ルートによる資格取得者と養成校卒業ルートによる資格取得者の両者のケアの質に言及した文献としては、先にも触れた厚生労働省での「介護福祉士試験のあり方等介護福祉士の質の向上に関する検討会（2003）」、「介護福

祉士のあり方及びその養成プロセスの見直し等に関する検討会（2006）」の他に、「介護福祉士制度及び社会福祉士制度のあり方に関する意見（2006）」⁽⁶⁾がある。これらの検討会においては、国家試験ルートによる資格取得者に対しては、「介護現場で働く者の資質の向上に資する役割」が期待されており、養成校卒業ルートの介護福祉士と比較して、概して、業務に直接結びついた介護技術は優れているという側面がある一方、なぜそのような介護を行うのかといった理論的な部分や制度的・倫理的面について十分な教育を受ける機会に欠けているとの指摘もなされている。他方、養成校卒業ルートの資格取得者に対しては、「介護福祉士試験のあり方等介護福祉士の質の向上に関する検討会」の中で、即戦力としては期待できないものであり、むしろ将来性に期待するべきという指摘がなされている。しかし、以上の指摘のいずれに関しても、実証データを踏まえたものとはなっていない。

渡部ら⁽⁷⁾の「老人福祉施設職員の職務意識に関する研究」は、職務意識に与える可能性のある要因を解明している。その中で、職務意識が資格を取るまでのプロセスによって異なるかどうかに関及しているが、「教育」が職務意識に関連しているか否かについては明確な結論を示していない。そして、今後の研究の課題として、職員の資格を取るに至る方法と資格と職務意識との関連を見ていく必要があると指摘している。

これまでの研究では、養成校卒業ルートによる資格取得者に関して、課題や問題点の指摘等がなされているものの、国家試験ルートによる資格取得者に関しては、「介護現場で働く者の資質の向上に資する役割」を期待されていながらも、具体的な資質や技術面まで踏み込んだ研究はほとんどない。

ケアの質を評価する方法・枠組みにはさまざまなものがあるが、介護福祉職に従事している人自身が介護福祉職のケアの質を評価するという方法も一つとして位置づけられる。このような方法を採用した場合、養成ルートの違いによってケアの質の違いがあるか否かについては、それぞれの養成ルートによる資格取得者によって、ケアの技能が養成ルートによって異なるか

否かを評価してもらうことが有効な方法と思われる。

3. 研究目的

本研究は、国家試験ルートによる資格取得者と養成校卒業ルートの資格取得者を対象に、自身の養成ルートおよび他の養成ルートそれぞれの資格取得者のケアの技能についてどのように評価しているかを質的調査に基づき解明することで、両者のケアの質の違いに迫ってみようというものである。このことを踏まえ、各養成ルートのケアの質の特長にマッチしたフォローアップ研修の必要性について言及しようと考えた。

II. 研究方法

1. 調査対象

本研究の調査対象である国家試験ルートによる資格取得者と養成校卒業ルートによる資格取得者は、施設管理者から調査の協力が得られた東京都および神奈川県に所在する特別養護老人ホームおよび介護老人保健施設の2種類の合計6施設に勤務する介護専門職であった。施設の内訳は、東京都にある特別養護老人ホームと介護老人保健施設の各2施設、そして神奈川県にある特別養護老人ホームと介護老人保健施設の各1施設の合計6施設（特別養護老人ホーム3施設、介護老人保健施設3施設）である。

東京都にある特別養護老人ホーム2施設については、ともに東京都西部のA市に所在しており、入所定員は2施設とも100名である。東京都の介護老人保健施設2施設についても、ともに東京都西部のA市に所在しており、入所定員は2施設とも100名である。神奈川県の特別養護老人ホーム1施設と介護老人保健施設1施設は、ともに神奈川県北部のB市に所在しており、入所定員は特別養護老人ホームが60名、介護老人保健施設が80名である。調査対象者は、上記6施設に勤務する国家試験ルートによる介護福祉士資格取得者と養成校卒業ルートによる介護福祉士資格取得者の合計92名であった。

2. 調査方法

自記式質問紙調査を留置法にて実施した。調

査票の配布については、平成19年10月に調査協力が得られた6施設の施設管理者を通じて対象者に配布した。質問紙の回収については、施設ごとに質問紙の回収箱を設置し、そこに入れてもらう方法で回収した。記入依頼後、2週間後に各施設から回収箱を回収した。

3. 調査項目

質問した項目はつぎの通りである。国家試験ルートで資格を取得した介護福祉士に対する評価については、①あなたから見た国家試験ルートで資格を取得した介護福祉士の良いところとは？、②あなたから見た国家試験ルートで資格を取得した介護福祉士の悪いところ（こうするともっと良くなると思うところも含めて）とは？、養成校卒業ルートで資格を取得した介護福祉士に対する評価については、③あなたから見た養成校ルートで資格を取得した介護福祉士の良いところとは？、④あなたから見た養成校ルートで資格を取得した介護福祉士の悪いところ（こうするともっと良くなると思うところも含めて）とは？の4項目であり、自由記述により回答を求めた。

以上のほかに、年齢階級、性、介護福祉士の資格取得ルート、実務経験年数について質問した。

以上の調査の実施にあたっては、桜美林大学の倫理委員会の承認を得た。

4. 分析方法

本研究のデータを分析方法として、KJ法⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾を使用した。KJ法を用いた理由としては、ケアの技能に関する評価の概念づくりを行い、さらに概念図を作成して図解化するためには、調査対象者の回答からアイテムを取り出し、それをカテゴリーに分類し、その構造化を図っていくという方法を定式化しているKJ法が最適であると判断したからである。

5. 分析対象者

調査票の回収数は80、回収率は87.0%であった。80名の資格取得のルート別の内訳は、国家試験ルートによる資格取得者が48名、養成校卒業ルートによる資格取得者32名であった。

表1には、国家試験ルートによる資格取得者と養成校卒業ルートによる資格取得者とで、性、年齢階級、実務経験年数、施設の種類の分布に違いがあるか否かを示した。国家試験ルートによる資格取得者の方が、年齢が高く、実務経験も長かった。さらに女性の割合が高いという特徴もあった。

Ⅲ. 結果

1. 国家試験ルートによる資格取得者の良いところに対する自己評価と他者評価（表2）

1) 国家試験ルートによる資格取得者による自己評価

国家試験ルートによる資格取得者による自己評価の内容は、大きく4つのカテゴリーを抽出することができた。第1は「介護における実践面」であり、「実務経験が活かしている」「即応性に優れる」「介護技術面の技能が高い」という3つのサブカテゴリーで構成されていた。第2は「介護に対する意欲面」であり、「資格取得後に自信が高まる」「職業意識が高い」という2つのサブカテゴリーで、第3は「介護する際の思考面」であり、「理想と現実との違いを認識している」「生活経験が介護の基盤となっている」という2つのサブカテゴリーで構成されていた。第4は「即戦力となる要因」であり、「知識が先行しない」「テキストを内実化している」という2つのサブカテゴリーで編成されていた。

各カテゴリーがどのような評価内容を示しているかについて具体的に説明してみよう。

第1の「介護における実践面」に関しては、資格取得以前から実務に携わっているため、資格取得後には早い段階で介護の現場でスムーズに動くことができるといったことや、特別養護老人ホームや介護老人保健施設の利用者と馴染みの関係を構築するスピードも早く、その利用者への対応において教科書通りに行かないような場面に直面しても経験から学んだ対応ができる、といった評価内容であった。要介護状態である特別養護老人ホームや介護老人保健施設の利用者の容態が急変した際などに、冷静な観察力によってその場において最適な判断をすることができるというような、いわゆる状況判断能力に優れている、利用者と直接的に接する時間が長いと、利用者の心理状態の把握がしやすい、さらに、働いているうちに自然と介護技術が身に付くといった評価もここに含まれる。

第2の「介護に対する意欲面」に関しては、介護福祉士資格取得後に国家試験に合格したという達成感が自分を支えていること、さらに合格によって仕事に対する自信が深まるとともに、介護福祉士に格別の思いや自分の資格を誇りに思うことができるようになることで、職業意識の高さにつながっているとの評価がそれにあたる。

第3の「介護する際の思考面」に関しては、主婦や子育ての経験を経て介護職に就いている、高齢者と同居をした経験がある、あるいは介護職に就く前に他業種を経験している、といった経験から体得した知恵や知識を介護業務の

表1 分析対象者の属性

属性		国家試験ルート	養成校ルート	有意差
年齢階級	40歳未満	37.5%	96.9%	**
	40歳以上	62.5%	3.1%	
性別	男性	25.0%	50.0%	*
	女性	75.0%	50.0%	
実務経験年数	5年未満	33.3%	68.8%	**
	5年以上	67.7%	31.2%	
所属施設	特別養護老人ホーム	50.0%	56.3%	N.S.
	老人保健施設	50.0%	43.8%	
	計	100.0%	100.0%	

注) 有意差検定は χ^2 検定。**: $P < .01$, *: $P < .05$, N.S.: $P > .05$

表2 国家試験ルートによる資格取得者の良いところに対する自己評価と他者評価

自己評価

コード	サブカテゴリー	カテゴリー
すぐにご利用者と交流できる 介護の現場でスムーズに動ける 資格取得後に早い段階で中間管理職としての活躍が期待される 経験から学んだ対応ができる 教科書通りに行かない場面で、経験を生かし対応できる	実務経験が生きている	介護における実践面
状況判断ができる 緊急の場面で応用が利く 急変時の冷静な判断ができる 急変時の観察力が優れている	即応性に優れる	
利用者の心理状態を把握し易い 基本はしっかり理解できている 自然と技術が身につく	介護技術面の技能が高い	
資格取得後の方が仕事に自信を持てる 介護福祉士に格別の思いが生まれる 合格した達成感が自分を支える 自分の資格を誇りに思える 資格取得後は責任感が強くなる	資格取得後に自信が高まる	介護に対する意欲面
プロ意識が高い 仕事に対する誇りが高い 気負いが少ない	職業意識が高い	介護する際の思考面
理想と現実とのギャップが少ない 勉強したことと実際のギャップがない 現場に合った介護方法を考えて行ける	理想と現実との違いを認識している	
主婦や子育てをした経験は、介護上大切 高齢者と同居した経験は大切 他業種を経験しているので世間を知っている 前職がある場合、その仕事の良いところを生かせる	生活経験が介護の基盤となっている	
現場主義であり、色々なことを経験できる 様々な事例を体験している 現場を良く知っている	知識が先行しない	即戦力となる要因
教科書で学ぶべきことが自然と身についている 資格取得前から職員同士で学べる 資格取得前から利用者や家族から学べる 資格取得時にはすでに3年の実務経験がある 知識と経験が伴った実践ができる テキストでは理解しにくいところも実体験している	テキストを内実化している	

他者評価

コード	サブカテゴリー	カテゴリー
現場経験を積みながら勉強しているので応用が利く すぐに実践できる技能を持っている 介護技術講習会を利用すれば技術面の基本も勉強できる	実践に応用が利く	介護における実践面
技術面が優れている 実務経験がある分、技術・知識が養成校より長けている	介護技術面の技能が高い	
向上心のある人が多い 介護福祉社に対する思いが熱い 勉強をよくしている 国家試験に対する意気込みが強い	職業意識が高い	介護に対する意欲面
テキストを読むだけの勉強ではない 現場で実践から学べる 経験が豊富なおうえに受験勉強で知識を得ている 3年間働きながら勉強できることは、分かり易く身になる	理想と現実との違いを認識している	介護する際の思考面
経験年数が3年あり国家試験に合格している 実務経験が3年以上ある	実務経験が豊富である	仕事における環境面
人間的に大人の人が多い 経験から来る安心感がある	人格に優れている	仕事における態度面

中に活かしている、資格取得ルートの性質上まず実務から介護に携わっているため、勉強したことと実務において経験することとの間にギャップが少ない、といった評価内容を含んでいる。

第4の「即戦力となり得る要因」については、様々な事例を体験し現場をよく知っていることから、実務において知識が先行することがない、資格取得前の段階から職員同士、利用者やその家族からの体験的な学びを多くしており、テキストでは理解しにくいところも実体験していることから、知識と経験が伴った実践ができるといったものであった。

2) 養成校卒業ルートによる資格取得者による他者評価

養成校卒業ルートによる資格取得者による他者評価（国家試験ルートの資格取得者の予良いところ）では、5種類のカテゴリーを抽出することができた。第1は「介護における実践面」で、「実践に応用が利く」「介護技術面の技能が高い」という2つのサブカテゴリーで編成されていた。第2は「介護に対する意欲面」で、「職業意識が高い」というサブカテゴリーで、第3は「介護する際の思考面」で、「理想と現実との違いを認識している」というサブカテゴリーで、第4は「仕事における環境面」で、「実務経験が豊富である」というサブカテゴリーで、第5は「仕事における態度面」で、「人格に優れている」というサブカテゴリーで構成されていた。

各カテゴリーがどのような評価内容を示しているかについて具体的に説明すると、第1の「介護における実践面」については、介護福祉士資格を取得する以前から現場経験を積み、さらに国家試験合格を目指して勉強もしている、近年では国家試験ルートによる資格取得者を対象とした「介護技術講習会」が厚生労働省によって制度化されたりなど、すぐに実践に応用できる技能を持っていることなどから、実務経験がある分、介護に対する知識や技術が養成校ルートによる資格取得者よりも長けているとの評価が該当する。

第2の「介護に対する意欲面」については、国家試験合格に対する意気込みが強く、それに伴ってよく勉強をしているなど、向上心のある

人が多く、介護福祉に対する思いも熱いなど、職業に対しての意識が高いとする評価する内容であった。

第3の「介護する際の思考面」については、経験が豊富な上に国家試験の受験勉強などでテキストからも知識を得ているため、働きながら勉強するという境遇について、勉強した内容がとても理解し易いであろうし、介護における理想と現実を認識しているのではないかという評価内容を反映している。

第4の「仕事における環境面」については、実務経験を少なくとも3年以上積んだ上で国家試験に合格している存在であるため、実務経験が豊富であるとの評価がそれにあたる。

第5の「仕事における態度面」については、人間的に大人だと感じるパーソナリティーの人がおり、その他にも利用者の介護をしている姿が経験から来る安心感に満ち溢れるなど、人格に優れていると評価内容であった。

2. 国家試験ルートによる資格取得者の悪いところに対する自己評価と他者評価（表3）

1) 国家試験ルートによる資格取得者による自己評価

国家試験ルートによる資格取得者による自己評価として、4種類のカテゴリーが抽出された。第1は「介護における実践面」であり、「介護技術の基本を知らない」「介護技術が我流」「苦手とする職域がある」という3つのサブカテゴリーで構成されていた。第2は「介護する際の思考面」であり、「資格取得前と後の意識の変化に乏しい」「思い込みが強い面がある」、「知識・理論・倫理が不十分」という3つのサブカテゴリーで、第3は「仕事における環境面」であり、「勉強や相談をする環境に恵まれない」というサブカテゴリーで、第4は「仕事における態度面」であり、「利用者に対しての態度が悪い」「同僚との協調性に欠ける」という2つのサブカテゴリーで構成されていた。

各カテゴリーがどのような評価内容を示しているかについては、第1の「介護における実践面」は次のようなものが含まれていた。介護技術の基本を知っているようで知らないことが

表3 国家試験ルートによる資格取得者の悪いところに対する自己評価と他者評価

自己評価

コード	サブカテゴリー	カテゴリー
介護の仕組みがよくわからない 介護技術の基礎がしっかりできていない 介護技術の基本を知っているようで知らない	介護技術の基本を知らない	介護における実践面
理論から学んでいないため、技術が自己流になりやすい 勤務先でしか通用しない介護技術である 施設で働いていると技術が自己流になってしまう 身体を痛める人が多いように思う	介護技術が我流	
利用者の精神面のフォロー不足が感じられる 国家試験合格前の実務経験が長かった人ほど新しいことに取り組みめない PCを使つてのデータ作りや書類作成が苦手 介護の記録が苦手 レクリエーションがスムーズにできない	苦手とする職域がある	
資格の重みが感じられない 資格取得前と取得後にあまり変わらない 資格は持っているが中身が伴っていない 資格を取得しても何が変わったのか実感がない 資格を取ったらもうそれでいいという考えの人がいる	資格取得前と後の意識の変化に乏しい	介護する際の思考面
自分で良いと思っている介護が、理論的に違っていることがある 思い込みで利用者に対応してしまう 我流でやってきた介護が良い介護と思ってしまう傾向がある 実践を振り返ることがあまりない 自分の体験に頼りすぎる	思い込みが強い面がある	
きちんとした知識がないまま働いている 福祉のトータル面での知識が乏しい 知っている専門用語の数が少ない 倫理の理解が不十分 幅広い考え方、方法がわからない 理論的に養成校より劣る	知識・理論・倫理が不十分	
最新の情報に疎い スキルアップの機会が少ない 施設の研修等は充実していない	勉強や相談をする環境に恵まれない	仕事における環境面
謙虚さに欠ける マナーの悪い人が多い 言葉遣いの悪い人が多い	利用者に対しての態度が悪い	仕事における態度面
自己中心的になりやすい 資格を取得した途端に勝手に突き進んでしまう人がいる 介護福祉士より先にヘルパーを取得した者は、ヘルパーを誇示する傾向がある	同僚との協調性に欠ける	

他者評価

コード	サブカテゴリー	カテゴリー
介護技術の基本をしっかりと学べていない 基本中の基本も学んでいない人がいる 介護技術の基礎があまりできていない	介護技術の基本を知らない	介護における実践面
勝手に思い込んで学んでいる 介護の基本動作が自己流 利用者への対応から入るのは危険 身体を痛める人が多い	介護技術が我流	
専門的な知識を知らないことがよくある 知識があるとはいえ、理論がない 利用者に対して変な先入観がある 職場で学んだことが全部正しいと思っている	思い込みや知識の不十分さがある	介護する際の思考面
相談相手が少ない 介護関係の人脈が狭い バーン・アウトする人が多い	勉強や相談をする環境に恵まれない	仕事における環境面
養成校ルートを見下すことがある わからないところや曖昧なところを指摘されるのを嫌がる	同僚との協調性に欠ける	仕事における態度面

ら、麻痺等の障害を持つ利用者に対する介護展開の順序やボディメカニクスなど、利用者へ提供する介護のみならず、介護者自身の身体を守るなどの点においても介護技術の基礎がしっかりできていない。そのため、介護技術が自己流に陥りやすく、勤務先でしか通用しない介護技術であり、仕事で身体を痛めてしまう人も多いということであった。直接的な介護以外にも、PCを使用したデータ作りや記録の作成をはじめ、利用者の精神面のケアやレクリエーション活動の展開など苦手とする職域があり、国家試験合格前の実務経験が長かった人ほど新しいことに取り組みないといった評価もみられた。

第2の「介護する際の思考面」については、知っている専門用語の少なさと倫理的な理解が不十分であるなど福祉の全体的な知識に乏しく、幅広い考え方や介護の方法などがわからないまま働いているため、理論的には養成校卒業ルートによる資格取得者よりも劣るのではという評価であった。また、思い込みが強く、自分の経験に頼りすぎたり、我流で実践してきた介護が客観的に良い介護であると思ってしまう傾向がある、自分が行ってきた介護の実践を振り返ることがあまりないと評価している。

第3の「仕事における環境面」については、最新の介護福祉に関する情報に疎く、OJT等のスキルアップの機会になかなか恵まれないなど勉強や相談をする環境に恵まれていないという評価がみられる。

第4の「仕事における態度面」については、言葉遣いやマナーの悪さや謙虚さに欠ける、介護福祉士資格を取得するよりも以前に2級ヘルパー資格を取得していた人は、その2級ヘルパー資格を誇示したりする、介護福祉士の資格を取得した途端に勝手なリーダーシップを取って突き進んでしまうなど自己中心的になりやすい、といった評価がなされている。

2) 養成校卒業ルートによる資格取得者による他者評価

養成校卒業ルートによる資格取得者による他者評価として、大きく4種類のカテゴリーを抽出することができた。第1は「介護における実

践面」であり、「介護技術の基本を知らない」「介護技術が我流」という2つのサブカテゴリーで構成されていた。第2は「介護する際の思考面」で、「思い込みや知識の不十分さがある」というサブカテゴリーで、第3は「仕事における環境面」で、「勉強や相談を環境に恵まれない」というサブカテゴリーで、第4は「仕事における態度面」で、「同僚との協調性に欠ける」というサブカテゴリーで構成されていた。

第1の「介護における実践面」については、介護技術の基本中の基本も学んでいないのではないかと感じるような人が存在するといった評価があった。自己体験からの勝手な思い込みによる学び、介護の基本動作が自己流であることによって身体を痛める人が多いなど、学問ではなく実務経験から実践することの危険性もあると評価されていた。

第2の「介護する際の思考面」に関しては、日頃の業務の中で専門的な知識を知らない、職場で学んだことが全部正しいと思っている、知識があったとしても理論がない、利用者に対して変な先入観を持っているという評価が見られた。

第3の「仕事における環境面」については、介護福祉業界内の人脈が狭く、仕事で悩んだ時や判断に困った時などの相談相手が少なく、パナアウトする人が多いといった評価が見られた。

第4の「仕事における態度面」について、評価の内容としては、利用者の介護方法において分からないところや曖昧なところがあった時に、それを指摘されるということを嫌がったり、養成校卒業ルートによる資格取得者を見下す態度や発言があるなど、同僚との協調性という面で欠けている面があるということであった。

3. 養成校ルートによる資格取得者の良いところに対する自己評価と他者評価 (表4)

1) 国家試験ルートによる資格取得者による他者評価

国家試験ルートによる資格取得者による他者評価として、3種類のカテゴリーが抽出された。第1は「介護における実践面」であり、「介護の基本を身につけている」「実習経験が役立っている」「介護の個別性を理解している」とい

う3つのサブカテゴリーで構成されていた。第2は「介護する際の思考面」で、「養成教育を受けた効果がある」というサブカテゴリーで、第3は「仕事における態度面」で、「人当たりが良

い」というサブカテゴリーで構成されていた。各カテゴリーについて、具体的な評価内容を要約して示してみよう。第1の「介護における実践面」については、介護に関する基本知識を

表4 養成校ルートによる資格取得者の良いところに対する自己評価と他者評価

自己評価

コード	サブカテゴリー	カテゴリー
介護技術の基礎を学んでいる 基本的な介護の手順を学んでいる 応用の前に基本をしっかりとし身に付けている 介護技術の技術的な根拠を学んでいる 入職後スムーズに仕事に入れる	正しい介護技術が身に付いている	介護における実践面
介護技術を実習で磨くことができる 複数の種類の施設を実習で知ることができる 複数の施設の介護方法を経験している	実習経験が役立っている	
個々の利用者になぜそのような介護が必要なのかという理解ができている	介護の個性を理解している	
学んで行く中で自分に向いている職業なのかを考えられる 介護福祉士を目指すという目標がしっかりしている 将来への土台作りができている	就学期間からモチベーションが高まる	介護に対する意欲面
基本的な知識が豊富 正しい知識を身に付けている 福祉の理念を学ぶことができる 福祉についての様々な分野を深く学べる 自己中心的になりやすい	介護に関する知識が幅広い	介護する際の思考面
現場では習わない机上の学習を基礎からしている 重要なポイントを効率良く学べる 充実したカリキュラムで学習できる 情報量が多い 在学中に教員から福祉に対する見識を学べる	養成教育を受けた効果がある	
悩んだ時に相談に乗ってもらえる同窓生がいる 卒業後も母校を相談の場として活かせる 意見交換できる同窓生が他施設にもいる 多くの福祉関係者の方々と交流できる 卒業後も勉学の場として活かせる	安心や向上ができる環境を持っている	
2年間という長い時間をかけて福祉各分野の知識を多く学べる 資格取得までの時間に余裕がある のびのびと勉強ができる 比較的短時間で国家資格を取得できる	精神的・時間的なゆとりがある	仕事における環境面

他者評価

コード	サブカテゴリー	カテゴリー
基本をマスターしており指導しやすい 記録はよくできる 介護の基本知識を良く知っている	介護の基本を身につけている	介護における実践面
実習があるところが良い 在学中に多くの施設職員から福祉に対する見識を学べる	実習経験が役立っている	
一つの事例に対して色々な対応方法を知っている	介護の個性を理解している	
たくさんの教材に触れることができる 学ぶ範囲が広いので知識がある 基本的なところをきちんと勉強している 仕事に必要な専門知識が豊富	養成教育を受けた効果がある	介護する際の思考面
優しく、素直な性格の人が多いように思う 利用者に対する姿勢が良い 言葉づかいが良い マナーの良い人が多い気がする	人当たりが良い	仕事における態度面

良く知っており、介護技術の基本もマスターしているため、入職後に指導しやすいといった評価や、記録類は良くできるといった評価がみられた。指定された種別の施設における実習が3段階方式により450時間設定されているため、在学中に実習を通して多くの施設職員から介護や福祉に対する見識を学んでいる、実習経験が実践面に効果をもたらすと評価、さらに机上で個別介護計画の手法を学び、実習でその実践も行うため、1つの事例に対して色々な対応方法を知っているという評価もみられた。

第2の「介護する際の思考面」については、在学中に学ぶ範囲が広範囲であるため、知識も広範囲に渡っていることや、たくさんの教材に触れた経験があるなど、仕事に必要な知識が豊富であるという、養成教育を受けた効果に関する評価がみられた。

第3の「仕事における態度面」については、言葉遣いやマナーが良く、優しく素直なパーソナリティを持った人が多いという評価、利用者に対する姿勢が良いなどの評価がみられた。

2) 養成校卒業ルートによる資格取得者による自己評価

養成校卒業ルートによる資格取得者による自己評価として、4種類のカテゴリーを抽出することができた。第1は「介護における実践面」で、「正しい介護技術が身についている」「実習経験が役立っている」「介護の個別性を理解している」という3つのサブカテゴリーで、第2は「介護に対する意欲面」で、「就学期間からモチベーションが高まる」というサブカテゴリーで構成されていた。第3は「介護する際の思考面」であり、「介護に関する知識が幅広い」「養成教育を受けた効果がある」という2つのサブカテゴリーで、第4は「仕事における環境面」で、「安心や向上ができる環境を持っている」「精神的・時間的なゆとりがある」という2つのサブカテゴリーで構成されていた。

各カテゴリーについて、具体的な評価内容を要約して示してみると、第1の「介護における実践面」については、介護技術の基礎や介護における基本的な手順を学んでいる、応用に入る前に基本をしっかりと身につけているなど、正

しい介護技術が身につけていることによって、入職後にスムーズに仕事に入ることができるという評価が見られた。在学中に実習が設定されていることによって実習の場で介護技術を磨くことができている、個々の利用者に「なぜそのような介護が必要なのか」個別性を理解しているという評価も見られた。

第2の「介護に対する意欲面」については、学校で学んで行く中で自分に対する適性を確認することができるなど、就学期間中から介護福祉職に対するモチベーションが高まると評価されている。

第3の「介護する際の思考面」については、現場では習わない机上の学習を、充実したカリキュラムで基礎からしていると評価している、情報量が多いが重要なポイントを効率よく学ぶことができているなどの評価が見られた。国家試験ルートによる資格取得者との違いとして、在学中に教員から福祉に対する見識を学べるといふ評価も見られた。

第4の「仕事における環境面」については、コースによって若干異なるものの資格取得までに2年間という長い時間をかけて、のびのびと福祉各分野の知識を学ぶことができることから、精神的にも時間的にもゆとりがある、入職後も母校を勉学の場として、困った時の相談の場として活かすことができるという評価がなされている。介護に関する意見交換や、悩んだ時に相談に乗ってもらえることができる同窓生の存在が、自分の勤務先以外の施設にもいる、同窓生以外にも母校のネットワークによって多くの福祉関係者と交流することができるという評価も見られた。

4. 養成校ルートによる資格取得者の悪いところに対する自己評価と他者評価 (表5)

1) 国家試験ルートによる資格取得者による他者評価

国家試験ルートによる資格取得者による他者評価として、3種類のカテゴリーが抽出された。第1は「介護における実践面」で、「柔軟性・応用性に欠ける」「精神的ケアの力量が不足している」という2つのサブカテゴリーで構成

されていた。第2は「介護する際の思考面」であり、「思考に偏りがみられる」というサブカテゴリーで、第3は「介護に対する意欲面」で、「個人の資質の差が大きい」というサブカテゴリーで構成されていた。

各カテゴリーについて、具体的な評価内容を要約して示してみよう。第1の「介護における実践面」については、現場を知らなさすぎる、利用者からの要求に対して柔軟な対応ができない、仕事全般に渡って臨機応変な対応ができないとの評価がみられた。マニュアル通りにしか

動くことができないなどといった評価もあった。

第2の「介護する際の思考面」については、利用者への思いやりの心に欠ける、利用者の心のケアができない、認知症高齢者や言語障害を持つ利用者とのコミュニケーションのとり方が上手にできないなど精神的なケアの力量の不足があるとの評価がなされていた。

第3の「介護に対する意欲面」については、介護の実践において、認知症高齢者の周辺症状への対応など、教科書通りに行かないところや場面についての学びがない、本人のモラルに

表5 養成校ルートによる資格取得者の悪いところに対する自己評価と他者評価

自己評価

コード	サブカテゴリー	カテゴリー
知識、技術の格差が顕著 応用力が劣る 実務に慣れるまでに時間がかかる	個人の資質の差が大きい	介護における実践面
精神面に対するケアができない人が増加している 利用者に対する恐怖感を持ちすぎてしまう	精神的ケアの力量が不足している	
学んで行く中で自分に向いている職業なのかを考えられる 介護福祉士を目指すという目標がしっかりしている 将来への土台作りができています	就学期間からモチベーションが高まる	介護に対する意欲面
学校で教えられたことが正しいと思いつつも 燃え尽き症候群になってしまう 頭が固い	柔軟性に欠ける	介護する際の思考面
理想的になり過ぎる 知識先行になりがち 現場に慣れてしまうと基本を忘れがちになる 就学中に学んだことを忘れてしまっている	理論と技術とに乖離がある	
介護関係の科目の時間数が少ない 実習時間をもっと増やせばよい 実習する施設数が少ない 授業で習ったことが直接仕事に結びつかない 卒業できれば国家資格が取れてしまう	養成プロセスに物足りなさを感じている	

他者評価

コード	サブカテゴリー	カテゴリー
臨機応変な対応ができない 柔軟な対応ができない マニュアル通りにしか動けない 知識が仕事に生かされていない 現場を知らなさすぎる	柔軟性・応用性に欠ける	介護における実践面
利用者に対しての思いやりに欠ける コミュニケーションの取り方がうまくない 利用者の心のケアができない	精神的ケアの力量が不足している	
授業で習ったことがすべてと思いつつも 自分が一番正しいと思っている 人の話を聞き入れることができない人も 理論的な考えに偏ってしまう	思考に偏りがみられる	介護する際の思考面
在学中にしっかりと自信をつけさせることが大切 本人のやる気で伸び方はまったく異なる 仕事が長く続かない 教科書通りに行かないところの学びがない	個人の資質の差が大きい	介護に対する意欲面

よって入職後の実力の伸び方は全く異なる、仕事が長続きしないという評価がなされていた。

2) 養成校卒業ルートによる資格取得者による自己評価

養成校卒業ルートによる資格取得者による自己評価として、3種類のカテゴリーが抽出できた。第1は「介護における実践面」で、「個人の資質の差が大きい」「精神的ケアの力量が不足している」というサブカテゴリーで構成されていた。第2は「介護する際の思考面」で、「柔軟性に欠ける」「理論と技術とに乖離がある」という2つのサブカテゴリーで、第3は「即戦力とならない要因」で、「養成プロセスに物足りなさを感じている」のサブカテゴリーで構成されていた。

各カテゴリーについて、具体的な評価内容を要約して示してみると、第1の「介護における実践面」については、応用力が劣る、入職後実務に慣れるまでに時間がかかる、各人における知識と技術の格差が顕著である、利用者に接する際に利用者に対して恐怖感を持ちすぎてしまう、利用者の精神面に対するケアができないが増加しているとの評価がみられた。

第2の「介護する際の思考面」については、学校で教えられたことを正しいと思い込んでいて、頭が固く、燃え尽き症候群に発展する思考である、介護に対して知識が先行になりがちで理想的になりすぎてしまうという評価がなされていた。就学中に学んだことを忘れてしまっている、現場に慣れてしまうと介護の基本を忘れがちになってしまうといった評価もみられた。

第3の「即戦力とならない要因」については、養成プロセスに関して介護関係の科目の時間数の少なさ、実習時間と実習施設の種別の少なさ、さらに授業で習ったことが直接的に実務に結びつかないといった評価が見られた。

5. 自己評価と他者評価の共通点・相違点

これまでに述べた国家試験ルートによる資格取得者および養成校ルートによる資格取得者による自己評価と他者評価の共通点を見てみると、国家試験ルートで資格を取得した介護福祉士の良いところについては、サブカテゴリーでみると、「介護技術面の技能が高い」「職業意識

が高い」「理想と現実との違いを認識している」の3つが共に一致していた。国家試験ルートで資格を取得した介護福祉士の悪いところについては、「介護技術の基本を知らない」「介護技術が我流」「勉強や相談をする環境に恵まれない」「同僚との協調性に欠ける」の4つが一致していた。

養成校卒業ルートで資格を取得した介護福祉士の良いところについては、「実習経験が役立っている」「介護の個別性を理解している」「養成教育を受けた効果がある」の3つのサブカテゴリーが、養成校卒業ルートで資格を取得した介護福祉士の悪いところについては、「個人の資質の差が大きい」「精神的ケアの力量が不足している」の2つのサブカテゴリーが共に一致していた。

各項目内における国家試験ルートによる資格取得者および養成校卒業ルートによる資格取得者による自己評価と他者評価のうち、明らかに相反している評価は本研究では見当たらなかった。

IV. 考察

1. 本研究の方法論的特徴

まず、ケアの質についての本研究の評価方法の妥当性について触れておきたい。専門職種である以上、客観的な評価指標に基づきその質を評価する方法も重要であるが、専門知識をもつもの同士がそれぞれの技能の質を評価する、すなわちピアレビューという方法も有効であると思われる。本研究では、自分の技能についての自己評価が概して甘くなるであろうことを考慮し、その評価の妥当性を確保するため、国家試験ルートによる資格取得者および養成校卒業ルートによる資格取得者それぞれについて、良い点と悪い点についての自己評価と他者評価に関する情報を収集し、ケアの質を評価しようと試みた。分析した結果、各ルートによる資格取得者の長所と欠点が、それぞれの立場からみても共通するものが多かった。このことは、本研究で明らかにされた評価の妥当性はある程度高いということを示しているといえよう。

2. 資格取得ルートの違いによるケアの質の違い

厚生労働省の「介護福祉士試験のあり方等介護福祉士の質の向上に関する検討会（2003）」と「介護福祉士制度及び社会福祉士制度のあり方に関する意見（2006）」において指摘された国家試験ルートと養成校ルートによるケアの質の違いが、本研究において明らかにされたのでどの程度支持されたか検討してみたい。

報告書では、国家試験ルートによる資格取得者は概して、業務に直接結びついた介護技術は優れているという側面がある一方、なぜそのような介護を行うのかといった理論的な部分や制度的・倫理的面について十分な教育を受ける機会に欠けている、他方、養成校卒業ルートの資格取得者は自立支援への意識や職業倫理性が高い傾向にあるといわれているが、「実務経験」がないため、いわゆる即戦力としては期待できないものであり、むしろ将来性に期待すべきと指摘されている。本研究では、先に示したように、自己評価と他者評価に共通するものとして、国家試験ルートによる資格取得者のケアについては、「介護技術面の技能が高い」「職業意識が高い」「理想と現実との違いを認識している」と肯定的な評価があるものの、「介護技術の基本を知らない」「介護技術が我流」「勉強や相談をする環境に恵まれない」と否定的な評価が下されており、報告書の指摘を実証する内容となっている。養成校ルートによる資格取得者のケアについても、「実習経験が役立っている」「介護の個別性を理解している」「養成教育を受けた効果がある」と肯定的な評価があるものの、「個人の資質の差が大きい」「精神的ケアの力量が不足している」と否定的な評価が下されており、報告書の指摘を支持する内容となっている。

3. 各養成ルートに則したケアの質の向上策の必要性

国家試験ルートによる資格取得者については、自己評価の良いところとして、介護技術面の技能が高く、利用者への対応における即応性に優れている一方で、悪いところとして介護技術の基本を知らず、介護技術が我流であるといったことが指摘されていた。しかし、自身の生

活経験が介護の基盤となっていることや、理想と現実の違いを認識していることから知識が先行しないという、経験についての肯定的な自己評価も持っている。

このような、相反する評価が国家試験ルートによる資格取得者の意識の中に存在する原因として、養成校卒業ルートよりも豊富な実務経験を持ちながらも、勉強や相談をする環境に恵まれていないといった点があるのではないかと思われる。この点に関しては、厚生労働省の社会保障審議会「社会福祉事業に従事する者の確保を図るための措置に関する基本的な指針」⁽¹¹⁾においてキャリアアップを支援するための検討が始まっており、今後の具体的な施策が待たれるところである。

養成校卒業ルートによる資格取得者は、資格取得に至るまでの養成校ルートの良いところとして、正しい技術が身に付いており実習経験も役立っているため、介護における個別性を理解していると評価している。他方、身につけた理論と技術とに乖離があり、特に利用者への精神的ケアの力量の不足や、柔軟性に欠け、養成プロセスに物足りなさを感じているといった評価も持っている。養成校卒業ルートについては、相反する評価が存在しながらも、彼らが良いところとして評価している「安心や向上ができる環境」、つまり自身の出身校という存在がある。すなわち、吉井⁽¹²⁾や谷⁽¹³⁾の指摘にあるように、今後は各養成校における卒業生のフォローアップ体制の構築への取り組みが重要であると考えられる。

4. 本研究の限界と課題

本研究では、国家試験ルートによる資格取得者および、養成校卒業ルートによる資格取得者から得た自由記述による自己評価および他者評価のデータを質的分析のみに限定して行った研究であるという点に限界がある。質的分析によって、国家試験ルートおよび養成校卒業ルートの各群からみた自身の良い点と悪い点、そして相手の良い点と悪い点については仮説の構築がなされはしたものの、そのような長所と短所を持つ人の広がりについては把握することがなか

った。今後は、本研究によって抽出されたカテゴリーに基づき、それを測定できるスケールの開発とそれによる量的研究が求められる。

また、本研究は専門職同士によるピア・レビューによるケアの質の評価であったが、そういった職員側からの視点の他にも、実際にサービスを受ける側である利用者の視点に立ったケアの質の評価も必要であると考えられる。

加えて、介護福祉士資格取得方法は、国家試験ルート、養成校卒業ルートの両ルートが国家試験受験に一本化されるという制度改革の動きもあり、今後はそういった制度の変更面も含めて検討していくことが重要であると考えられる。

さらに、本研究では、自己評価と他者評価のコードの数について特徴があった。それは、4つ質問のうち「養成校ルートで資格を取得した介護福祉士の悪いところ」の項目を除いた3つの項目で、国家試験ルートによる資格取得者および養成校卒業ルートによる資格取得者両群において、他者評価のコード数が自己評価のコード数の約50パーセント程度と少なかったことである。このことは、質問紙による質問方法の技術的な点が問題であった可能性があることが考えられる他、問題背景の異なる相手の技能を評価しようとするのが困難であることを示しており、他者評価の妥当性については多少疑問な点もあることが示唆されている。

V. まとめ

本研究は、国家試験ルートによる資格取得者と養成校卒業ルートの資格取得者を対象に、自身の養成ルートおよび他の養成ルートそれぞれの資格取得者のケアの技能についてどのように評価しているかを質的調査に基づき解明した。分析の結果、資格取得ルートの違いによってケアの質が異なる可能性が示唆された。同時に、それぞれのケアが抱える問題点を解消するための方法についても提案を行った。

【参考文献】

- (1) 財団法人社会福祉振興・試験センター、http://www.sssc.or.jp/index_2.html
- (2) 厚生労働省「介護福祉士試験のあり方等介護福祉士の質の向上に関する検討会」
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/06/s0602-6.html>
- (3) 澤田信子『今、あなたに求められる介護』中央法規出版、1998.
- (4) 厚生労働省監修『厚生労働白書（平成17年版）』ぎょうせい、2005.
- (5) 厚生労働省「介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直し等に関する検討会」
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/07/s0705-6.html>
- (6) 厚生労働省「介護福祉士制度及び社会福祉士制度の在り方に関する意見」
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/12/dl/s1212-4b.pdf>
- (7) 渡部律子、澤田有希子、設楽英美、月田奈美「老人福祉施設職員の職務意識に関する研究（1）」『関西学院大学紀要』Vol.24、1-38、2002.
- (8) 川喜田二郎『発想法』中公新書、1967.
- (9) 川喜田二郎『続・発想法』中公新書、1970.
- (10) 川喜田二郎『KJ法 混沌をして語らしめる』中央公論社、1987.
- (11) 厚生労働省「社会福祉事業に従事する者の確保を図るための措置に関する基本的な指針」
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/07/dl/s0704-5c.pdf>
- (12) 吉井珠代「介護福祉士の質の向上を目指した卒後教育」『大阪城南女子短期大学研究紀要』第37号、105-121、2003.
- (13) 岡本千秋「資質向上が求められる背景」『介護福祉教育』中央法規出版、2002.
- (14) 江草安彦「介護福祉士養成の到達点と課題」『介護福祉教育』中央法規出版、2005.
- (15) 澤田信子「介護福祉養成教育は幸せの鍵を握る秘められた宝」『介護福祉教育』中央法規出版、2005.
- (16) 服部ユカリ、梶田悦子、村山正子「在宅介護支援センターにおける看護婦の活動に関する研究（第3報）看護職からみた支援センターの現状」『富山医科薬科大学看護学会誌』第1号、69-77、1998.
- (17) 鈴木由美、岡崎史子、小林淳子、鈴木修治「仙台市T地区高齢者の健康づくりのためのイン

- タビュー調査」『日本公衛誌』第51巻1号、13-19、2004.
- (18) 長田久雄、古谷野亘『実証研究の手引き』ワールドプランニング、1992.
- (19) 高橋順一、渡辺文夫、大淵憲一『人間科学研究法ハンドブック』ナカニシヤ出版、1998.
- (20) 辻新六、有馬昌宏『アンケート調査の方法』朝倉書店、1987.
- (21) 澤田信子「介護福祉実践のための人材育成と研究に関する考察」『介護福祉学』第13号、35-46、2006.